慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ディアスポラの知識人たちとの出会い : クワメ・ンクルマの政治思想(二)
Sub Title	Encounters with diaspora intellectuals : the political thought of Kwame Nkrumah (2)
Author	阿久津, 昌三(Akutsu, Shozo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2016
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.89, No.2 (2016. 2) ,p.261- 288
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関根政美教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20160228-0261

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ディアスポラの知識人たちとの出会い

――クワメ・ンクルマの政治思想（二）――

阿久津昌三

一　倹約と勤勉
二　フィラデルフィアの黒人調査――デュボイスとンクルマ
三　フレイジア・ハースコヴィッツ論争

一　倹約と勤勉

クワメ・ンクルマ（Kwame Nkrumah）（一九〇九―一九七二）は、一九三九年にリンカーン大学を卒業し、その後、ペンシルベニア大学の大学院に進学した。ペンシルベニア大学はフィラデルフィアにある。

フィラデルフィアはウィリアム・ペンが建設したアメリカ最初期の計画都市であり、アメリカのクェーカー教徒の中心地であることは知られている。また、フィラデルフィアはベンジャミン・フランクリンの舞台であることでもよく知られている。[1] フィラデルフィアは古代ギリシア語でフィロス（愛）とアデルフォス（兄弟）とア

（都市名につく語尾形）という意味で「フィラデルフィア」と命名された都市である。福沢諭吉に学び藩閥政治を批判した馬場辰猪が客死したのもフィラデルフィアである（フィラデルフィアは漢語で「費拉特費」で、短縮して「費府」と表記される）。ンクルマはフィラデルフィアでの倹約と勤勉について語っている。それはペンシルベニア大学での生活を維持し学費を稼ぐためである。

私はチェスター（フィラデルフィアのデラウェア川に臨む南西郊外の都市）のサン造船所に勘定係として雇われたのだ。季節を問わず、深夜の十二時から翌朝の八時まで働いた。特に冷えた日には、手が鋼鉄にはりつきそうになり、もっている全部の衣服を着ても、骨の髄からがたがたと震えた。いつも朝の八時に下宿にもどって、朝食を食べ、数時間眠ってから、論文を書くための調べものを始めた（中略）肺炎にかかった（中略）ベッドに寝ながら、私ははじめて自分の生活をゆっくり、筋道をたてて考えた。これまでのように毎日二十四時間をぶっとおしに頑張り続けることが愚かに思われた。その上、死の一歩手前にいることを自覚したためでもあろうか、無性に母に会いたくなった。病気が治りしだい、なるべく早くアメリカを去って故国にもどろう、と私は決心した。(2)

アクラの師範学校の時代に、アグレイ博士が死んだという知らせがあって激しいショックを受けて以後、食事もとらずに勉強に励むことができるように、身についた習性でもあった。

私はあらゆることに興味を失って、少なくとも三日間は、何ひとつ食べることができなかった。（中略）胃の腑がカラでも、勉強を続けるエネルギーだけはあふれるほどあることに気づいたのも、この時だった。（中略）この発見は、後にアメリカ、イギリスへ行った時にたいへん貴重なものになった。私は貧乏なために食事もとらずに――勉強もし、休暇には大学の授業料を稼ぐために働きもしなければならなかったからである。(3)

故国を離れてアメリカの大学に留学してからもンクルマは倹約と勤勉を続けてきた。リンカーン大学の時にはニューヨークのハーレムで仕事をしている。魚の行商をやっていたとか魚の塩漬けをする仕事をしていたと書かれている。フルトン魚市場で卸商を通じて仕入れをしたのかと想像してみたがよくわからない。その後、フィラデルフィアのペンシルベニア大学で学んでいる。この大学は野口英世が勤務していたということでも知られている[4]。野口英世が黄熱病で黄金海岸のアクラで死亡したのは一九二八年である。ンクルマが十九歳の時である。ンクルマがアチモタ師範学校で学んでいた時期である。野口英世が住んでいた下宿と大学との距離がとても近いのには驚いたことがある。実験室と下宿を往復していた野口英世の姿が目に浮かぶ。

それはさておき、ンクルマがフィラデルフィアで住んでいたという下宿を探したことがある。それは中心街の北西にあるハヴァーフォードという町の三九丁目の北六〇三番地にあった。この家の前で写真を撮っていると、反対車線に自動車を止めて若い女性が話しかけてきた。なんと「私の家」であるとのこと。「こんな人が住んでいたなんて知らなかった」。かなり立派な住まいなので驚いた。家の中を見せてもらうと、当時は、アパートのフラットの部屋をさらに細分化した住居となっていたことがわかる。ンクルマは『自伝』のなかで次のように語っている。

> アメリカでの十年間は、楽しくもあり、多忙でもあったが、同時に苦労も非常に多かった。もし勉強だけに全部の時間を使えたら、私の生活はもっと楽であったに違いない。現実にはいつも金が足らず、生活費を得るためにさまざまな苦労をしなければならなかった[5]。

これはまさに「時間を失うな。常に何か有益なことをしていよ。要らざる行動はすべて断ち切るべし」というベンジャミン・フランクリンの倹約と勤勉の精神を想起させるものである。

本稿は、「クワメ・ンクルマの政治思想―『わが祖国への自伝』を読む」（『法学研究』第八四巻第六号、二〇一一年）の続編である。本稿は、フィラデルフィアの黒人調査、また、アメリカ黒人はアフリカの文化遺産を継承しているのかしていないのかというフレイジア・ハースコヴィッツ論争の主題をとりあげることによって、ディアスポラの知識人たちとの出会いを明らかにすることが課題である。ディアスポラの知識人とは、デュボイス、フレイジア、ハースコヴィッツ、ボアズ、パーク、ミュルダール、ガービィーたちである。なお、ガービィー、C・L・R・ジェイムズ、ジョージ・パドモアについては稿を改めて論述することになる。

二　フィラデルフィアの黒人調査――デュボイスとンクルマ

フィラデルフィアはアメリカ合衆国ペンシルベニア州南東部にある都市である。二〇〇〇年現在の国勢調査によると、フィラデルフィアには人口一五一万七五五〇人、約五九万世帯、約三五万家族が暮らしているという。人種的な構成は、白人四五・〇二%、アフリカ系アメリカ人四三・二二%、先住民〇・二七%、アジア人四・四六%などとなっている。民族的な構成は、アフリカ系四三・二二%、アイルランド系一三・六%、イタリア系九・二%、プエルトリコ系八・一%、ドイツ系六・四%、ポーランド系四・三%となっている。アフリカ系アメリカ人の総人口に占める割合に限定すると、一八八〇年には三・七%、一八九〇年には三・八%、一九〇〇年には四・八%、一九一〇年には五・五%、一九二〇年には七・四%、一九三〇年には一一・三%、一九四〇年には一三・〇%、一九五〇年には一八・二%、一九六〇年には二六・四%、一九七〇年には三三・六%というように

増加していることがわかる。[6]

一九二〇年のアメリカ三大都市の人口は、ニューヨークが五六二万人、次いでシカゴが二七〇〇万人、さらにフィラデルフィアが一八二万人となっている。一九三〇年には、デトロイトとロサンゼルスが新たに百万人都市となった。

クワメ・ンクルマがフィラデルフィアに住んでいた当時の一九四〇年の人口は一九三万一三三四人であり、特に、アフリカ系アメリカ人は、一九二〇年の一三万四二〇〇人から一九四〇年の二五万八八〇人に増加しており、全人口の一三・〇%を占めていた。

ブラック・パワーが増大していた時期にあたる一九五〇年には四〇万人に増加しており、職業別では、一九三〇年代にはアフリカ系アメリカ人は専門職一・八%、経営者及び地主二・六%で、半熟練及び未熟練労働者が八二・三%を占めており、専門職といってもその大半は小学校教員というのが現状であった。一九三七年に学校職員は公に人種差別撤廃が実施されたが、アフリカ系アメリカ人が一〇〇%を占めていない学校でも黒人の教員は八一人にすぎなかった。市内にある中学校一三四校にはひとりの黒人教員がいただけで高等学校にはひとりもいなかった。黒人の子弟で中学校に進学した数はきわめて少ないというのが実情でもあった——一九三二年には黒人は小学校人口の一七%、中学校人口の九%、高等学校人口の六%を占めていたにすぎない。このような実情のなかではまして大学や専門学校に進学するものはほとんどなかった。一九四一年から一九四二年までの間にペンシルベニア州全体ではアフリカ系出身の子弟が大学に籍を置いていたのは五八四人で、その内、リンカーン大学には三六三人が所属していた。[7]

わが国では奥田道大がフィラデルフィアを調査している数少ない研究者のひとりである。奥田道大は都市社会学の観点からフィラデルフィアの大都市衰退地区の再生について調査している。調査地域はフィラデルフィア旧

市街の東端を南北に貫くデラウェア川の沿岸に点在する再開発地域で、特に、サウスウォークという名のコミュニティである。サウスウォークは、デラウェア川沿いの小さな港町としてスウェーデン人の移民たちによって開発されたが、フィラデルフィア中心地からは周縁にあたるためにスラム化が進んでいったという。スウェーデン系に続いて、イングランド系、アイルランド系、ドイツ系、ロシア系、アフリカ系その他の系統に及ぶ混在地域であり、フィラデルフィアによく見られる移民の歴史の縮図ともなっている。

フィラデルフィアを対象とした都市社会学の研究に、W・E・B・デュボイス（William Edward Burghardt DuBois）（一八六八―一九六三）の『フィラデルフィアのニグロ』（一八九九年）の「復刻版の序文」を執筆しているペンシルベニア大学のディグビー・バルゼルの『ピューリタン・ボストンとクェーカー・フィラデルフィア』（一九七九年）という大著がある。題名からしてマックス・ヴェーバーの都市の諸類型を想像してしまうものだ。清教徒（ピューリタン）のボストンが自らの価値体系に異質なものを排除するのに対して、クェーカー教徒のフィラデルフィアは自らの価値体系に異質なものを包摂するという枠組みで書かれている。(8)

奥田道大はボストンとフィラデルフィアの都市を比較して「古フィラデルフィア型は、黒人人口をはじめとするエスニック・マイノリティの相対的比重の高さ、人種的、階層的入れ替わり現象の激しさ、衰退化現象の発現をいち早く見た現在のフィラデルフィアの様相と無縁ではない」(9)と記述している。私も大学院の学生時代に都市社会学の矢崎武夫先生の授業でボストンとフィラデルフィアの都市調査のモノグラフを読んだことがあるが、バルゼルの二都物語のエスノグラフィーを読んでヴェーバーの都市類型とも重なり合ったのを記憶している。関根政美先生の学部のサブゼミでマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を輪読していた経験が生きたわけである。なお、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』はタルコット・パーソンズ（Talcott Parsons）（一九〇二―一九七九）によって一九三〇年に翻訳されている。クワメ・ンクルマ

も英訳で読んでいた。

もうひとつの調査は「フィラデルフィア社会史プロジェクト」とよばれるものである。このプロジェクトは、ペンシルベニア大学の歴史学のテオドア・ヘルシェベルクたちによるものであり、十九世紀のフィラデルフィアにおけるアイルランド移民やドイツ移民との比較を通して黒人の社会的、経済的状態を歴史学的に検証しようとしたものである。この新しい都市史の調査は、編著者も書いていることでもあるが、都市問題研究所、国立精神衛生研究所の委託を受けて一九六九年に始まったという。つまり、黒人の公民権運動の激しさが増してきた時期にあたる。また、フィラデルフィアの総人口に占める黒人の割合が、急激に増加してきたこともプロジェクトが立案された背景としてあげられる。この調査は「仕事」「空間」「家族」「集団の経験」という主題のもとに学際的な研究を実施している。[10]

アラン・バーンシュタインの調査は、シカゴ学派の社会学者ギデオン・ショバーグ（Gideon Sjoberg）の調査をモデルに実施されたものであるが、十九世紀にはエスニック・ゲットーが形成されていなかったという報告がなされている。[11] ステファニ・グリーンバーグは、「非同質化」の指標から計量的な方法で一八八〇年の民族集団の居住と産業立地との関係を分析している。黒人の場合には就労産業に関係なく黒人同士で居住する傾向があるのに対して、白人の場合には就労産業が居住地を決定することを明らかにしている。[12] さらに、テオドア・ヘルシェベルクたちは、アイルランド移民やドイツ移民の場合には職業が白人のそれに近づくにつれて居住凝離の度合が減少しているのに対して、黒人と白人との居住凝離は、一八五〇年の四七、一八八〇年の五二、一九三〇年の六一、一九四〇年の六八、一九五〇年の七一、一九六〇年の七七、一九七〇年の七五というように増加していることを明らかにしている。[13]

ここまでフィラデルフィアの都市調査について紹介してきた。これらの調査をとりあげたのは、クワメ・ンク

ルマが、一九三〇年代の終わりから一九四〇年代中頃まで居住していたと同時に一九四一年には都市調査のアルバイトをしながら学費を稼いでいたと語っているからである。ンクルマは『自伝』のなかで黒人家族調査について次のように述べている。

フィラデルフィアにいたとき、宗教的、社会的、経済的な観点から黒人の徹底的な調査を実施した。この仕事は、長老教会からあたえられたもので、フィラデルフィアに住む六〇〇の黒人の家族に、ドイツ人街やリーディングなどの黒人の家族をくわえた多数を私は調べた。ひじょうに興味深い仕事で、アメリカ合衆国の、特に、南部の激しい人種問題に対して私の眼をひらいてくれた。アメリカの人種差別を、この国のモダニティや進歩性と比較して、私の心を沈ませたものだ。(14)

ここでは「ひじょうに興味深い仕事で、アメリカ合衆国の、特に、南部の激しい人種問題に対して私の眼をひらいてくれた」と書いている。それは次のような人種差別の経験とも重なって『自伝』のなかで語られる。

私自身がきびしい人種差別をはじめて経験したときのことははっきりと憶えている。フィラデルフィアからワシントンへ講演旅行に出かけた途中、乗客の気晴らしのためにバルティモアでバスが停まった。私はのどがからからに乾いていたので、駐車場の喫茶室にはいり、アメリカ人の白人の給仕に水を一杯もらえないかとたのんだ。給仕は眉をひそめて、なにか不潔なものででもあるかのように私をじろじろ見まわして、「表のたんつぼの水でも飲め」と眼をそむけながらいった。私はあっけにとられて身動き一つできず、突っ立ったまま、相手を見つめていた。皮膚の色がちがうだけで、一杯の水をさえことわる人間がいるとは信じることができなかったからだ。それまでもバスや飲食店やその他の公共の場所で人種差別を経験してはいたが、それらとはくらべものにならないとさえ思われた。(15)

一九四一年の夏にンクルマは長老派福音教会の委員会によってフィラデルフィアの学生訪問員及び宗教責任者に任命されたと語っている。ジョンソン学部長宛の七月十七日付の手紙のなかで、ンクルマは「仕事はフィラデルフィアの六〇〇以上の黒人の家族を訪問するものです。すでに市の五つの長老派教会で踏査の仕事を行なっています。ドイツ人街やリーディングで同様の仕事をしようと希望しています」と書いている。また、九月十一日付の手紙でも「夏期の福音委員会が最終報告のために九月十二日に開催されます。踏査の仕事の一般的な報告を済ませて勧告をしたいと思っています。（中略）仕事は充実していますし、そこから得た経験は大切に心に抱き続ける価値があります」とも書いている。[16]

ンクルマがフィラデルフィアで黒人の家族調査に従事していたという経歴が真実であるか真実ではないかはモニカ・シャーウッドが再検討しているが、ンクルマがデュボイスの『フィラデルフィアの黒人―ひとつの社会踏査（サーベイ）』[17]（一八九九年）というモノグラフを意識して自伝を書いていることは確かだ。

デュボイスの『フィラデルフィアの黒人』は次のような章立てから構成されている。

第一章　本研究の範囲
第二章　問題
第三章　フィラデルフィアの黒人　一六三八―一八二〇年
第四章　フィラデルフィアの黒人　一八二〇―一八九六年
第五章　黒人住民の規模、年齢、性
第六章　夫婦事情
第七章　黒人住民の出処
第八章　教育と非識字（無学）
第九章　黒人の職業
第十章　黒人の健康
第十一章　黒人の家族
第十二章　黒人の組織生活
第十三章　黒人の犯罪
第十四章　貧民とアルコール中毒
第十五章　黒人の環境
第十六章　人種の接触

第十七章　黒人の参政権　　第十八章　最後の言葉

また、このモノグラフには『第七地区黒人家事労働特別調査』が附則として掲載されている。

第一章　序
第二章　黒人家事労働目録
第三章　供給源と雇用方法
第四章　事業と賃金の等級
第五章　貯蓄と支出
第六章　娯楽とリクリエーション
第七章　黒人家事労働の長さと質
第八章　黒人家庭の夫婦事情、非識字（無学）、健康
第九章　改善目標

デュボイスの『フィラデルフィアの黒人』は社会学的な調査方法にもとづいたモノグラフであることは明らかであろう。ここではデュボイスの社会学的想像力がどのように形成されたのかを探ってみたい。デュボイスには複数の『自伝』がある[18]。デュボイスは一八八八年に南部にあるフィスク大学を卒業した。フィスク大学の卒業式ではビスマルクについて演説している。その後、ハーバード大学の三年に編入学した。編入学となったのは、フィスク大学の学力水準が「低い」ためであったという。また、当時のハーバードはきらめく星のごとく優れた教授陣がいたと語っている――心理学のウィリアム・ジェームズ（William James）（一八四二―一九一〇）、倫理学のパーマー、哲学のロイスとサンタナヤ、地質学のシェーラー、歴史学のハートたちである[19]。デュボイスは『自伝』のなかで次のように語っている。

私がハーバードにいたのは教育を受けるためであって、そこに残るのに十分である以上の成績をとるためではなかっ

た。合格するのが容易な科目は取らなかった。（中略）なによりも私は哲学を勉強したかったのだ！　私は、知識を高めるための基礎を固めて、知の基盤とはじまりを探求したかったのだ！　したがって、私はパーマーの倫理学を選んだ。しかし、かれは一年間研修でお休みだったので、ウィリアム・ジェームズがその代わりを務めることになったのだ。私は、ジェームズがプラグマティズムの哲学を展開しようとしているときに、かれの熱心な弟子になったのである。（中略）ウィリアム・ジェームズは私を学問的な哲学の不毛性から抜けださせ現実主義的なプラグマティズムへと導いてくれたのだ。（中略）わたしは、ウィリアム・ジェームズ、ジョサイヤ・ロイス、若い頃のジョージ・サンタヤナなどの精緻な分析を楽しんだものだ。しかし、ジェームズとかれのプラグマティズム、そしてアルバート・ブッシュネル・ハートとかれの調査手法は、楽しくはあっても不毛な哲学的思索から、私の黒人研究に適用すべく事実を集めたり、解釈したりする分野にふさわしいものとして、社会諸科学に私の目をふたたび向けさせたのだった。（中略）私はもうこの頃には、研究しながら生活していく唯一の現実的な方法は、教えることだと気づいていたし、ハートの合衆国史の授業をとってからは、哲学を人種関係の歴史的な解釈に適用することを考えるようになった。言い換えれば、私は人間の行為の科学としての社会学にむかって新たな一歩を踏みだそうとしていたのである。(20)

一八九〇年、デュボイスは優秀な成績で哲学の学位を得て卒業している。ハーバード大学にはまだ社会学は学問分野として存在していなかったので、デュボイスは大学院で歴史学科と政治学科で勉強することになった。デュボイスは指導教員のハートの薦めもあって二年間（一八九二―九四年）ドイツのベルリン大学に留学することになる。ドイツでは経済学、歴史学、社会学を学んだという。デュボイスは火を吐くような熱弁でもって語るハインリッヒ・フォン・トライチュケ（Heinrich von Treitschke）（一八三四―一八九六）の熱狂的なナショナリズムの講義に出席した。

アフリカは文化も歴史ももたないことにされたままだった。混血人種の問題にふれた時などは、明らかにかれらは劣っているのだとわざわざ述べた。ベルリンで偉大なるハインリッヒ・フォン・トライチュケの講演を聞いたあの朝のことを、私はけっして忘れることはできない（中略）かれの言葉は洪水のように押し寄せた。「混血（ムラート）は！」とかれは怒鳴った。「劣っている」。まるでかれの両眼が私をくり抜こうとしているように感じた。もっともかれはたぶん私に気づいてはいなかっただろう。Sie fühlen sich niedriger！（かれは程度が低いことは自覚している）とかれは断言した。あの威圧的な力説をだれが拒むことができようか。[21]

また、デュボイスはマックス・ヴェーバー（Max Weber）（一八六四―一九二〇）の講義を聞いた。さらに、グスタフ・フォン・シュモラーの授業ではアメリカ農業について報告し、教師たちと学生たちとヨーロッパの社会情勢について議論したと語っている。[22]

「ヨーロッパ滞在」（*Wanderjahre* in Europe）はデュボイスの考えに大きな影響をおよぼすことになった。デュボイスは「たんに狭い人種的、地域的なものの見方からではなく、ひとりの人間として世界を見る」[23]ことができたと語っている。コーネル・ウェストの言葉では、デュボイスは「アメリカにたいする敵意のはけ口とアメリカの偏狭さにたいする洞察」[24]をも学んだという。

大変喜ばしいことに、ヨーロッパ人は私と同じように、アメリカを文明の最終的なかたちなどとは思っていないのである。ハーバードがフィスクで得た学位を認めなかったように、ベルリン大学がハーバードの学位を認めなかったことに、私はある意味で満足したのである。（中略）アメリカ人はお金儲けは得意だが、その方法には無頓着で、そのためにはやりたい放題であるといったことなどにみな揃って同意していた。ときとして、かれらのアメリカ批判は、私の反アメリカの皮膚をいらだたせることさえあった。しかし、総じて、アメリカが私にとって意味するようになったものに

たいする私自身の態度について、他人の口から発せられるのを聞くのは、新鮮だった。[25]

一八九四年の六月、デュボイスはニューヨークをめざす移民とともに「黒んぼ（ママ）嫌い」[26]のアメリカに戻った。デュボイスはオハイオ州のジーニアにあるウィルバーフォース大学でギリシャ語とラテン語を教えた。この大学では息が詰まりそうだったと述懐しているが、この時期に、ハーバード大学に提出することになる、アフリカからの奴隷貿易の禁止に関する博士論文を完成させている。デュボイスは、艱難辛苦を経て、フィラデルフィアの黒人社会を調査する依頼を受けたのである。まさに僥倖である。

黒人問題は、私の頭のなかでは、体系的な調査と理性的な理解の対象であった。世間は、人種について間違った考えをしている。というのも正しい考えとはどういうものなのか知らないからだ。究極的な悪は愚かさである。それにたいする治療は科学的調査にもとづいた知識である。[27]

デュボイスの『フィラデルフィアの黒人』はチャールズ・ブース（Charles Booth）（一八四〇―一九一六）の『ロンドンの民衆の生活と労働』（一八九一―一九〇三年）を雛型にした調査方法をとっていることは知られている。シカゴ学派のパークがドイツのジンメル社会学の影響を受けたものであるのに対して、デュボイスの「ヨーロッパ滞在」のなかで構築されたのである。パークは長い記者生活の後、ハーバード大学でジェームズ、ロイス、サンタヤナに哲学を学んだ後に、ドイツのベルリン大学に留学することになる。ジンメルの講義に出席する。シュトラースブルク大学（後にハイデルブルク大学）のW・ヴィンデルバントの指導のもとで「群集と公衆―方法論的及び社会学的研究」という博士論文を提出している。[28] シカゴ学派の都市社会学が隆盛となる時期のはるか以

前にこのような都市調査が実施されたことには意義がある。黒人家族の調査が本格的に実施されるのは経済恐慌の時期になってからである。

一九三〇年代の経済恐慌は綿花栽培に決定的な打撃をあたえ、新たな仕事をもとめて南部の農業地帯から移動し重要工業地帯に集中していたのである。アメリカ合衆国という国家を再構築するためにも都市部に集住する黒人の実態調査がもとめられたのである。一九三〇年代から一九四〇年代まではまさに黄金時代であり、フレイジアの『アメリカの黒人家族』（一九三九年）、ダラウドの『ある南部の町のカーストと階級』（一九三九年）、デービスとガードナー夫妻の『深南部』、ミュルダールの『アメリカのジレンマ』（一九四四年）、ドレイクとケイトンの『ブラック・メトロポリス』（一九四五年）など大都市に集住する黒人調査のモノグラフが出版された。また、国内研究では、青柳清孝『アメリカの黒人家族』（一九八三年）とその体験を綴った『黒人大学留学記―テネシー州の町にて』（一九六四年）がある[29]。さらに、ミュルダールはスウェーデンの経済学者であるが、一九三八年にニューヨークのカーネギー財団が公正な立場からアメリカの黒人調査を実施するために招聘したものである。約三〇名の黒人問題を専門とする研究者たちが調査研究に従事して『アメリカのジレンマ』として集大成化されたことで知られている。

ンクルマが黒人家族を調査したと語っているのもデュボイスが調査対象としたフィラデルフィアである。マリカ・シャーウッドはンクルマの海外での生活を緻密なまでに調べた歴史学者であるが「フィラデルフィアには夏期の調査に関する長老派教会の公文書はまったく存在しない」と断言している。『自伝』に書かれている「ひじょうに興味深い仕事で、アメリカ合衆国の、特に、南部の激しい人種問題に対して私の眼をひらいてくれた」ということが、「フィラデルフィアや周辺の黒人の家族調査で理解できるはずがない」、また、「別の機会に南部を訪れたことがあったのか」と疑義をただしている。シャーウッドはさらに『福音協会年報』を調べて、J・

R・ワットとR・W・ブリンガーズという同僚とともにンクルマが福音派協会の家族調査を実施していること、また、『ある踏査―フィラデルフィアの黒人』（A Survey: The Negro in Philadelphia）という報告書も出版されていることを突き止めている。しかし、これらの調査者たちが一九四一年に調査したことがこの報告書に含まれている可能性があるとしても、内部文書として踏査報告書が公刊されたのは、ンクルマがロンドンに旅立った後の一九四六年のことであると結論づけている。(30)

三　フレイジア・ハースコヴィッツ論争

ンクルマがアフリカ人とアフリカ系アメリカ人をどのようにとらえていたのかを考えるために『自伝』のなかで語られているフレイジア・ハースコヴィッツ論争をとりあげてみよう。ンクルマはこの論争について次のように述べている。

その頃私は合衆国内の社会学の二つの学派に興味をもった。ひとつはフレイジア教授の指導するハワード大学系の社会学者によって代表されるもので、もうひとつはノースウェスタン大学の人類学教授M・J・ハースコヴィッツ博士の指導する学派であった。ハワード学派はアメリカの黒人はアフリカとの文化的な結びつきを完全に失っていると主張し、ハースコヴィッツの代表する学派はアメリカにもアフリカ的な要素が残っており、したがって、アメリカの黒人はアフリカ大陸との文化的な結びつきを決して失っていないと主張していた。私は後者の考えを、その時も、今も支配しているが、この学派を応援するためにハワード大学へ一度出かけたこともあった。(31)

これはハワード大学の社会学者エドワード・フランクリン・フレイジア（Edward Franklin Frazier）（一八九四

―一九六二）とノースウェスタン大学の人類学者メルヴィル・ハースコヴィッツ（Melville J. Herskovits）（一八九五―一九六三）との間の論争であり「フレイジア・ハースコヴィッツ論争」とよばれている。つまり、アメリカ黒人はアフリカの文化遺産を継承していないかそれとも継承しているのかということが争点となったものである。具体的には、ブラジル東部のバイアの黒人家族をめぐって論争が展開された(32)。

ここではアメリカの黒人家族というテキストをもとに検討してみよう。フレイジアが『アメリカの黒人家族』（一九三九年）のなかでアフリカの文化遺産の抹殺説を唱えたのに対して、ハースコヴィッツは『黒人の過去の神話』（一九四一年）のなかでアフリカの文化遺産の継承説を唱えている。これは、アフリカ系アメリカ人の社会学者とユーロ系アメリカ人の人類学者との論争としても知られている(33)。

ここでフレイジアとハースコヴィッツとはどのような人物であるのかをとりあげてみよう。フレイジアはロバート・パーク（Robert Ezra Park）（一八六四－一九四四）とアーネスト・バージェス（Earnest W. Burges）（一八八六―一九六六）を代表とするシカゴ大学の都市社会学を学んだ研究者である。フレイジアは一九三二年にシカゴ大学に提出した博士論文「シカゴの黒人家族」をもとに『アメリカの黒人家族』（一九三九年）を出版し、アニスフィールド賞を受賞している。この研究は、同心円地帯モデルにもとづいて黒人家族の生態を明らかにした黒人を対象とした黒人による初めての社会学的調査である。パークが一九一四年にシカゴ大学に招聘されるまで、アラバマ州のタスキーギ研究所でブッカー・T・ワシントン（Booker T. Washington）の秘書をしていたことと重ね合わせると興味深い事実が浮びあがる。このためにはワシントンがデュボイスと敵対関係にあったという補助線を引いてみる必要があるが、これについては後述する。パークはタスキーギ研究所、そしてそこに形成された黒人コミュニティで調査に従事することになるが「パークの最良の弟子」と言われたのがフレイジアであった。

これに対して、ハースコヴィッツはコロンビア大学のボアズ学派に属する人類学者である。ハースコヴィッツ

は一八九五年にオハイオのベルファウンテンに生まれた。テキサスのエルパソ、ペンシルベニアのエリーで育つ。母はドイツ系ユダヤ人であり、父はプラハ近郊のオーストリア・ハンガリー帝国の出身であった。乾物商を営んでいたという。ハースコヴィッツはオハイオのシンシナシティのヘブライ連合大学で改宗派のラビになるために勉学を始める。セミナリオで勉学を励み徴兵を延期されていたが第一次世界大戦に登録されることになった。かれはシカゴ大学で歴史学の学士号を取得した。その後、コロンビア大学に入学してフランツ・ボアズに師事する。ハースコヴィッツは一九二三年に「東アフリカのウシ複合」という題目で博士論文を提出している。この論文はクラーク・ウィスラー（Clark Wissler）の文化領域（culture area）モデルをアフリカに適用したものである。大学院終了後にはニューヨークの都市調査に従事している。黒人の身体測定を実施することで環境がどのように移民の物理的な特性に影響を及ぼすのかというものである。これらの研究はアメリカ黒人の人種的な同化という新しい視点をもたらすことになった。ハワード大学で任期付きの講師を務めた後に、ノースウェスタン大学の教授職に就任した。そこで人類学部を設置する。一九六三年に亡くなるまで大学で教職の立場にあった。特に、ハースコヴィッツはアフリカ系アメリカ人のコミュニティ研究を集大成したことでも知られる。具体的には、『アメリカの黒人―人種的な境界の研究』（一九二八年）、『アメリカの身体測定学』（一九三〇年）、『アメリカの過去の神話』（一九四二年）などである。ハースコヴィッツは「アフリカの残存」（African survivals）と名づけ、後に「アフリカニズム」（Africanism）と改めて提唱している。(34)

『アメリカの過去の神話』は、第一章「アフリカニズムの意義」、第二章「部族起源の探究」、第三章「アフリカの文化遺産」、第四章「奴隷化と奴隷身分に対する反発」、第五章「文化変容のプロセス」、さらに「現在の概況」と題して第六章「世俗生活におけるアフリカニズム」、第七章「宗教生活におけるアフリカニズム」、第八章「言語と諸芸術」という章立てになっている。これらを詳細に紹介することはできないが、身体的性癖と心的態

度、一夫多妻制、性的寛容さ、広範な内縁関係、私生児に対して偏見がないこと、母系社会、大家族制度、祖先崇拝、トーテム信仰、教鞭（教育としての鞭打ち）、葬儀の重要性などのアフリカの文化遺産が残存していることを明らかにしたのである。[35] これらはンクルマが『自伝』で書いているアフリカの文化遺産と同じなのである。[36] ンクルマが「ハースコヴィッツの代表する学派を応援するためにハワード大学へ一度出かけたこともあった」と語っているのも当然のことであった。

ハースコヴィッツとフレイジアとの論争を考えるとき、かれらの師弟関係がどのようになっているかをみると、前者が民族学のフランツ・ボアズ（Franz Boas）（一八五八―一九四二）の弟子であり、後者は社会学のロバート・パークの弟子である。人種関係の論争においては、前者がデュボイスと、後者がワシントンとの関わりがあったという意味で重要である。

ボアズは、一九〇六年五月一日に黒人のための高等教育機関であるアトランタ大学で「アメリカ黒人の前途」と題する卒業記念講演をおこなっている。[37] ボアズを招聘したのはデュボイスであり、デュボイスは、アメリカには「黒人には歴史がない」という根拠もない思い込みがあったので、アフリカには高度に発達した文明の歴史があったという事実を知って目覚めたと述懐している。太田好信は、ボアズによる卒業記念講演の意義について、文化の脱人種化、あるいは人種的劣等という宿命の檻から、ボアズが黒人たちを解放したことだろうと述べている。

ボアズのこの講演をコンテクスト化するには、当時アフリカには文明はない、という見解が支配的であったことを明記することが必要がある。それに対抗するため、ボアズは二つの主張をおこなう。一つには、アフリカは文明がない暗黒大陸ではなく、しっかりとした文明の歴史が存在する場所であるという。すなわち、当時の黒人には歴史はないとさ

れていたから、この歴史を回復し、人種的な誇りをもつべきだという結論である。（中略）もう一つは、文化を人種化して語ることを否定していることである。この姿勢は一九二八年に出版される『人類学と現代生活』に明確に打ちだされるが、ボアズのアメリカ社会への貢献として数えあげることができよう。[38]

一九五四年アメリカ合衆国における人種差別待遇を違法とした最高裁判決――この判決は「ブラウン対トピーカ教育委員会事件判決」（通称「ブラウン判決」）とよばれている。アメリカ公立学校における州当局お墨付きの人種隔離政策を憲法違反とした歴史的な判決である。[39] この判例は、アメリカ公民権運動の根底にある「分離するといえども平等である」（separate but equal）というドクトリンのもとに、「ボアズ的」文化相対主義に訴えて、最高裁が人種差別待遇の撤廃を支持したものとみているものもある。[40] 太田好信は、リー・D・ベーカーの『野蛮からニグロへ――人類学と人種の構築　一八九六―一九五四年』（一九九八年）をもとに、次のように述べている。

最高裁判決はその根拠を「ボアズ的」文化相対主義――この文脈では、ボアズが黒人に対して主張した同化論ではない――には求めず、ボアズの弟子ハースコヴィッツの論敵であった社会学者F・フレイジアの立論に依拠したミュルダール報告書に求めている。ミュルダールは、黒人には特殊な文化があるのではなく、その文化はアメリカ社会からの疎外という「病的な」状況が生んだものにすぎないという。最高裁判決は、疎外の根源が人種隔離政策であり、それを撤廃する決定をくだしたことになる。[41]

ミュルダール（Gunnar Myrdal）（一八九八―一九八七）の『アメリカのジレンマ』は、第二次世界大戦終結後から二〇年にわたって、人種問題に関するリベラル主流派のバイブルとなっていた。ブラウン判決では、『アメリカのジレンマ―黒人問題と現代民主主義』が引用されており「二〇世紀において社会科学の研究が最高裁判所で

の判決に具体的内容を与えた初めての事例」であるとされており、また、「それより早い連邦裁判所による判決にも『アメリカのジレンマ』からの長い引用文」があるという[42]。

『アメリカのジレンマ』は「社会現象として完全に客観的かつ公平的になされるべきアメリカの黒人に関する包括的研究」として位置づけられていて「人類学、経済学、教育学、そして公衆衛生や行政機関を含め、その問題の社会的諸側面に関する専門家として適格な協力者集団やアメリカ人たちを配置できるようにすることになろう」とカーネギー・コーポレーションの取締役フレドリック・P・ケッペルの提案もあって動きだした。ミュルダールは一九三八年の九月初めにアメリカに到着した[43]。ンクルマがリンカーン大学を卒業する前年のことである。

ミュルダールはアメリカ南部への長期旅行から仕事を始めた。南部の人種差別政策の実態には衝撃を受け、黒人に関する包括的研究のための冷静な判断力をもってニューヨークにもどった。ミュルダールは研究プロジェクトの主任として問題の所在に関する書物になるほど長い覚書や報告を執筆するスタッフを雇っている。そのなかには社会学者のフレイジア、ラルフ・バンチ（Ralph Johnson Bunche）（一九〇四―一九七一）などがいる。フレイジアには『シカゴの黒人家族』（一九三二年）、『合衆国の黒人家族』（一九三九年）の著書があった。ラルフ・バンチはハーバード大学博士号をもつ政治学者で、国連での中東外交の手腕が認められて一九五〇年にノーベル平和賞を受賞している。

研究テーマは「黒人の知能テスト、黒人における精神障害、異人種間結婚、黒人の協会及び協同組合、黒人の健康状態、黒人の家族、黒人と犯罪、黒人の出版物、アメリカの黒人のレクリエーションと娯楽、黒人の人口移動、アメリカの経済システムにおける黒人、アメリカの教育における黒人、黒人社会の社会的階層基盤などの論点」がとりあげられた[44]。この研究進行段階において、一万五〇〇〇枚ものタイプ打ち原稿が提出された。これらの研究論文の大半は独立した著作として出版された。これらの著作のなかに、ハースコヴィッツの『黒人の過去

の神話』（一九四一年）、チャールズ・S・ジョンソンの『黒人の凝離の諸類型』（一九四三年）、リチャード・スターナーの『黒人のシェア』（一九四三年）、ラルフ・バンチの死後にまとめられた『ローズヴェルト時代における黒人の政治的地位』（一九七三年）などがある。

ミュルダールは『アメリカのジレンマ』の「序文」で次のように書いている。

> アメリカの黒人問題はアメリカ人の心の問題である。（中略）われわれの研究は経済的、社会的、政治的な人種関係を含めるが、われわれの問題は根底においてアメリカ人のモラル上のジレンマ――さまざまなレベルでの良心や普遍性に関する個人の道徳的価値評価間のコンフリクトなのである。この本の題名にもした「アメリカのジレンマ」とは、一方で、われわれが「アメリカ的信条」と呼ぶところの一般的次元で見られるような価値評価、他方で、個人や集団の生活において特殊的次元で見られるような価値評価との激烈なコンフリクトである。前者において、アメリカ人は高度な国民的ならびにキリスト教的規範からの影響を受けて、考え、話し、行動している。他方、後者においては、個人的ないしローカルレベルでの利益、経済的・社会的・性的な警戒心、コミュニティの威信と画一化への配慮、特定の人や特定タイプの人々への集団別差別、そして種々雑多な欲望や衝動や慣習などが、個人の見地を支配している。(45)

アメリカの人種関係をめぐってミュルダールは著名な人類学者と対立することになった。この意味で、フレイジア・ハースコヴィッツ論争は、ミュルダールにとって、人類学者のハースコヴィッツの属するボアズ学派ではなく社会学のフレイジアの属するシカゴ学派あるいは学際的な研究者集団からなるハワード大学のサークル（以下、「ハワード・サークル」と略す）に軍配をあげている。ミュルダールは『貨幣的均衡』（一九三二年）の理論をアメリカの人種関係に適用させて次のように述べている。

われわれは黒人の「生活レベル」が白人のそれよりも低いと想定する。（中略）一方で、黒人の生活レベルは白人側から差別によって低められており、他方で、白人の差別意識の理由はある部分、黒人の生活レベルに依拠している。黒人の貧困、無知、迷信、スラムでの居住、健康上の欠陥、見た目の汚さ、無秩序な行為、悪臭、犯罪行為によって、白人の黒人に対する反感が刺激され増幅されている。(46)

黒人の「生活レベル」は「複合的総体」であり、雇用、賃金、住居、栄養、健康、教育などの変数によって影響を受けるものであるとしている。

雇用の増加は、勤労所得を多くし、生活水準を向上させ、健康、教育、マナー、法の遵守を向上させるであろうし、またその逆も成り立つであろう。教育の向上は、より高い賃金が得られる仕事につける機会を増すことになろうし、逆もまた成り立つであろう。諸変数からなる体系の全般において、こうした作用が生じるのである。（中略）どのように変化が生じるかは個々独立の作用によるとしても、これらの諸要因のどれかひとつでも変化するのであれば、それらすべての間でプラスまたはマイナスに作用する累積的効果の総量によって、体系全体が一方または他方へと状況に応じて動きだすことになろう。(47)

『アメリカのジレンマ』は一九四四年一月に出版された。フレイジアやデュボイスもミュルダールの人種差別政策批判に喝采を送っている。

アメリカの歴史において、この分野をこれほど完全に網羅した学者はいない。ミュルダールは事実を誤魔化していない。（中略）彼は南部に譲歩していない。（中略）かれは正確な数学的計測をあたえるような事実のみに依存することが

ないという意味において、「科学的」であろうとしているのではない。換言すれば、ミュルダールの社会学はそれ自体、物理学的・生物学的アナロジーから解放されているのであり、開放的かつ率直に、感情・思考・理念といったものを考慮にいれている。[48]

これらの判決以後、ミュルダールの精神はマーティン・ルーサー・キング・ジュニア（Martin Luthur King Jr.）（一九二九―一九六八）、ローザ・パークス、またフリーダム・ライダーの活動において現実的なものとなった。

（1）ゴードン・S・ウッド『ベンジャミン・フランクリン、アメリカ人になる』池田年穂・金井光太朗・肥後本芳男訳、慶應義塾大学出版会、二〇一〇年。
（2）ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、理論社、一九六〇年、四四頁（一部改変）。
（3）ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、二八頁（一部改変）。
（4）浅倉稔生『フィラデルフィアの野口英世』三修社、一九八七年。
（5）ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、四四頁（一部改変）。
（6）http://ja.wikipedia.org（「フィラデルフィア」の項目による）。また、E. Digby Baltzell, "Introduction to the 1967 Edition," (in) W. E. B. DuBois, *The Philadelphia Negro: A Social Survey*, New York: Schocken Books, 1967 (1899), pp. ix-xliv.
（7）Marika Sherwood, *Kwame Nkrumah: The Years Abroad 1935–1947*, Legon: Freedom Publications, 1996, pp. 27–28.
（8）E. Digby Balzell, *Puritan Boston and Quaker Philadelphia: Two Protestant Ethics and the Spirit of Class Authority and Leadership*, New York: Free Press, 1979.

（9） 奥田道大「都市的世界・コミュニティ・エスニシティ―アメリカおよび日本の大都市におけるエスニック・コミュニティの変容と再編」奥田道大編『コミュニティとエスニシティ』勁草書房、一九九五年、一四頁。また、奥田道大「大都市再定義の文脈―フィラデルフィアの事例」『白山社会学研究』一（一九八六年）、一―三頁、奥田道大「『サバーバニズム』再考の現実的契機―フィラデルフィア大都市圏の二つの事例から」『日本都市社会学年報』一九（二〇〇一年）、八七―一〇五頁を参照されたい。

（10） Theodore Hersberg (ed.) *Philadelphia: Work, Space, Family, and Group Experience in the Nineteenth Century: Essays Toward an Interdisciplinary History of the City*, New York: Oxford University Press, 1981.

（11） Alan N. Burnstein, “Immigrants and Residential Mobility: The Irish and Germans in Philadelphia, 1850–1880,” (in) Theodore Hersberg (ed.) *Philadelphia: Work, Space, Family, and Group Experience in the Nineteenth Century: Essays Toward an Interdisciplinary History of the City*, New York: Oxford University Press, 1981, pp. 174–203.

（12） Stephanie W. Greenberg, “Industrial Location and Ethnic Residential Patterns in an Industrializing City: Philadelphia, 1880,” (in) Theodore Hersberg (ed.) *Philadelphia: Work, Space, Family, and Group Experience in the Nineteenth Century: Essays Toward an Interdisciplinary History of the City*, New York: Oxford University Press, 1981, pp. 204–232.

（13） Theodore Hersberg et al., “A Tale of Three Cities: Blacks, Immigrants, and Opportunity in Philadelphia, 1850–1880, 1930, 1970,” (in) Theodore Hersberg (ed.) *Philadelphia: Work, Space, Family, and Group Experience in the Nineteenth Century: Essays Toward an Interdisciplinary History of the City*, New York: Oxford University Press, p. 463.

（14） ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、五一頁（一部改変）。

（15） ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、五二頁（一部改変）。

（16） Sherwood, 1996, p. 59.

（17） W. E. B. DuBois, *The Philadelphia Negro: A Social Study* (with an Introduction by E. Digby Baltzell), New York: Schocken Books, 1967 (1899).

(18) W. E. B. DuBois, *Dark Water: Voices from within the Veil*, New York: Dover Publications, Inc., 1999 (1920); W. E. B. DuBois, *Dusk of Dawn: An Essay Toward an Autobiography of a Race Concept*, New Brunswick and London: Transaction Publishers, 1984 (1940); W. E. B. DuBois, *The Autobiography of W. E. B. DuBois*, New York: International Publishers, 1968; W. E. B. DuBois, "A Pageant in Seven Decades 1878–1938," (in) Philip S. Foner (ed.) *W. E. B. DuBois Speaks: Speeches and Addresses*, New York: Pathfield Press, 1970, pp. 21–72. 通常、デュボイスの「自伝」とよばれているのは三番目の著作でデュボイスが死んだ五年後に出版されたものを指している。なお、デュボイスはアメリカの国益を損なう恐れがある危険人物として海外渡航を制限されていたが、ンクルマの招聘で、アメリカ国籍を放棄してガーナの市民権を獲得してアクラで生涯を閉じたのは一九六三年のことである。また、千葉則夫『W・E・B・デュボイス―人種平等獲得のための闘い』(近代文芸社、二〇〇三年)を参照されたい。

(19) DuBois, 1970, p. 29.

(20) DuBois, 1968, pp. 133, 148.

(21) DuBois, 1984 (1940), pp. 98–99.

(22) DuBois, 1968, p. 162. ベルリン大学のトライチケ、ウェーバー、シュモラーについては、潮木守一『キャンパスの生態誌―大学とは何だろう』(中央公論社、一九八六年)を参照されたい。

(23) DuBois, 1968, p. 159.

(24) コーネル・ウェスト『哲学を回避するアメリカ知識人―プラグマティズムの系譜』村山淳彦・堀智弘・権田健二訳、未來社、二〇一四年、三一〇頁。ポール・ギルロイは、デュボイスの思想とエマソン、ジェームズなどのプラグマティズムの系譜に位置づけようとするウェストについて「デュボイスの近代性批判にある新しさと力が見過ごされる」として次のように批判している。

「『黒人のたましい』が進歩の諸前提を解きほぐし、人種改善の戦略において進歩が占める地位を批判していくさまは、まるで見えなくなる。もっと悪いことに、デュボイスが熱心につくりあげた洞察力としての二重性という企ては、見失われてしまう。そうしてアメリカの知的自民族中心主義(エスノセントリズム)の余計な肯定へとはまりこんでしまうのである」(『ブラック・アトランティック―近代性と二重意識』上野俊哉・毛利嘉孝・鈴木慎一郎訳、月曜社、二〇〇六年、二六九

頁）。

（25） DuBois, 1968, p. 157.

（26） DuBois, 1968, p. 183. なお、デュボイスの『フィラデルフィアの黒人』の調査プロジェクト百周年を記念して編纂されたものに、Michael B. Katz and Thomas J. Sugrue (eds.) *W. E. B. DuBois, Race, and the City: The Philadelphia Negro and Its Legacy* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1998) を参照されたい。

（27） DuBois, 1984 (1940), p. 58.

（28） シカゴ学派のパークについては秋元律郎『都市社会学の源流―シカゴ・ソシオロジーの復権』（有斐閣、一九八九年、二四四頁）を参照されたい。

（29） E. Franklin Frazier, *The Negro Family in the United States*, Chicago: The University of Chicago Press, 1939; John Dollard, *Caste and Class in a Southern Town*, New Haven: Yale University Press, 1939; Allison Davis, Burleigh B. Gardner and Mary R. Gardner, *Deep South*, Chicago: The University of Chicago Press, 1941; Gunnar Myrdal, *An American Dilemma: The Negro Problem and Modern Democracy*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1944; St. Clare Drake and Horace R. Cayton, *Black Metropolis*, New York: Harper Row, 1945; 青柳清孝『アメリカの黒人家族』青木書店、一九八三年。また、青柳清孝『黒人大学留学記―テネシー州の町にて』（中央公論社、一九六四年）を参照されたい。

（30） Sherwood, 1996, p. 29.

（31） ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、五四頁（一部改変）。

（32） E. Franklin Frazier, “The Negro Family in Bahia, Brazil,” *American Sociological Review* 7 (1942): 465–478; Melville J. Herskovits, “The Negro in Bahia, Brazil: A Problem in Method,” *American Sociololgical Review* 8 (1943): 394–402; E. Franklin Frazier, “Rejoinder to Melville J. Herskovits, The Negro in Bahia, Brazil: A Problem in Method,” *American Sociological Review* 8 (1943): 402–404. フレイジア・ハースコヴィッツ論争の舞台となったのが、アメリカ社会学会でシカゴの専制への反乱が起こり、学会誌となった American Sociological Review (ASR) であることに留意したい。一九三〇年代までシカゴ大学社会学部が編集権を独占していた学会誌が American Journal of

Sociology (AJS)である。パークがsurveyという言葉を嫌い、researchという言葉を好み、デュボイスの都市調査を社会学的ではないものとして排除したのかについては、北田暁大「社会学的忘却の起源―社会学的プラグマティズムの帰結」(『現代思想』四三(一)(二〇一五年)、一五六-一八七頁)を参照されたい。

(33) E. Franklin Frazier, *The Negro Family in the United States*, Chicago: The University of Chicago Press, 1939.

(34) 青柳清孝「ハースコヴィッツ」綾部恒雄編『文化人類学群像1　外国編①』アカデミア出版会、一九八五年、二九九-三一三頁、Celya Frank, "Melville J. Herskovits on the African and Jewish Diaspora: Race, Culture and Modern Anthropology," *Identities* 8(2) (2001): 173-209.

(35) Melville J. Herskovits, *The Myth of Negro Past*, Boston: Beacon Press, 1958 (1941); Melville J. Herskovits, *The Anthropometry of the American Negro*, New York: AMS Press, 1969 (1930).

(36) 阿久津昌三「クワメ・ンクルマの政治思想―『わが祖国への自伝』を読む」『法学研究』第八四巻第六号、二〇一一年。

(37) Franz Boas, *The Shaping of American Anthropology 1883-1911: A Franz Boas Reader*, edited by G. W. Stocking, Jr., New York: Basic Books, Inc. Publishers, 1974.

(38) 太田好信「同時代的モダニズム―ハーレム・ルネッサンスと文化人類学」『現代思想』二六(七)(一九九八年)、一一〇-一一一頁(『民族誌的近代への介入―文化を語る権利は誰にあるのか』人文書院、二〇一一年所収)。

(39) T・ジェームズ・パターソン『ブラウン判決の遺産―アメリカ公民権運動と教育制度の歴史』籾岡宏成訳、慶應義塾大学出版会、二〇一〇年。

(40) Dinesh D'Souza, *The End of Racism: Principles for a Multiracial Society*, New York: Free Press, 1995, pp. 19, 194.

(41) 太田好信「媒介としての文化―ボアズと文化相対主義」太田好信・浜本満編『メイキング文化人類学』世界思想社、二〇〇五年、六一-六二頁。Lee D. Baker, *From Savage to Negro: Anthropology and the Construction of Race, 1896-1954*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1998.

(42) ウィリアム・J・バーバー『グンナー・ミュルダール―ある知識人の生涯』藤田菜々子訳、勁草書房、二〇一一

年、一三〇頁。

（43） バーバー、前掲書、一一一頁。

（44） バーバー、前掲書、一一三頁。

（45） Gunnar Myrdal, *An American Dilemma: The Negro Problem and Modern Democracy,* New York: Harper & Brothers Publisher, 1944 (1964), p. xlvii（原文には強調がある）。

（46） Myrdal, 1944, pp. 1066-1067.

（47） Myrdal, 1944, pp. 1066-1067.

（48） W. E. B. DuBois, “The American Dilemma,” *Phylon: The Atlanta University Review of Race and Culture* 5 (Second Quarter, 1944), pp. 121-122.